IMAJ ニュース
NO.35
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和59年3月30日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL.03－821－3737(代)
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

第4回　開発のための対話

（共通のアイデンティティを求めて……）

〈1984年1月15日～20日　インド〉

開発途上国の将来、また明日の世界のあり方について考えるMRA国際会議「開発のための対話」が、インドのマハラシュトラ州にある、パンチガーニのMRAセンター〝アジアプラトー〟にて、開催されました。

今回で4度目を数えるこの会議には、ニューデリー駐在のエジプト領事、チベットのダライ・ラマの代表、カルカッタ・ボンベイ・プーナ・アッタープラデッシュ州からの労使代表、また、少数民族による独立運動のさかんな北東インドからの参加もありました。

日本からは、ボンベイ駐在の西端国輝（にしべり）（領事）夫妻、青木一能（日大助教授）、中堂幸政（世界経済調査会）、相馬雪香（国際MRA日本協会副会長）、高橋千恵（MRA事務局）各氏が参加されました。これにヨーロッパやアメリカ、アジア、オセアニア諸国からも集まり、世界14ヶ国から120名の参加を得て、卒直な話し合いが進められました。

パンチガーニ会議レポート

●国民の75%が困窮の生活を強いられているインドの開発のために、ガンジーの教えと農業とを重視する必要を説く参加者

真に望まれる「開発」が、国外や国内の争いや対立などによって、とかくなおざりにされがちです。二十世紀末にいたってもなお、二億人の子供達が飢えに悩むような現状を打開するには、人種や宗教、価値観等のあらゆる「相違点」を乗り越える必要があります。それだけに、「共通のアイデンティティを求めて」というテーマは、このインドでの国際会議にふさわしいものだったといえましょう。

開会の辞で、フィリピンの元外相でアメリカ在住のマングラパス氏は、「開発や発展を追い求める際に、『寛大さ』や『自由』を決して失ってはならない。」と強調され、世界最大の人口で民主主義を実践するインドを評価し、その役割への期待を述べられました。

インドの開発のために、このアジアプラトーは、大切な役割をになってきたといえるでしょう。この会議は、センター設立以来十六年間の努力の結晶ともいうべきものです。ここで定期的に開かれている産業人セミナーには、既に八十社以上が、訓練のために二千五百名もの人々を送っています。その訓練では、まわりの人々との接し方や態度に重きが置かれ、その効果は会社のみならず、参加者の家庭や地域社会にも及んでいるとのことです。例えば、機械部品を製造するプーナのジェーン・マーシャル社は、貧しい村に病院や青少年のための施設、職業訓練所等を建設しました。プーナやジャムシェドプール、ハイデラバードの工場などでも、MRAのセミナーが、今までに幾度か開かれています。

「産業」がテーマとなったミーティングでは、ボンベイで織物工場に勤務するビシャナント・サバントさんが発言しました。この人は、心に響く声に従っていくうちに、毎年乾期には使用不可能となっていた村の井戸を、協力者をつのって修理することができたという話をしました。サバントさんとその仲間は、それから、村と主要道路を結ぶ道を直し、セメント作りの学校を建て、水道の確保のために寄付を募ったりもしました。初めのうちは、「なんで余計なことばかりしなくちゃいけないの。まずは自分の家族のことから考えてほしいものだわ。」と不満顔だった奥さんも、サバントさんが率先して始めた仕事の数々から、多くの人が恩恵をこうむり始めたのを見て、考えを変えたそうです。

「もし私達が心の声に耳を傾けさえすれば、不可能なことすら可能になります。」サバントさんは確信に満ちて、こう結論を述べられました。

●ボンベイ駐在の西端領事(中央)と同夫人(左となり)を囲んで――領事の右となりは相馬雪香さん

『今、あらゆる相違点を越えて』

(財)世界経済調査会研究員
中堂幸政

私はこれまで、中東地域の動向を興味をもって研究してまいりました。特に中東の経済についての研究が私の専門であります。そして、中東研究者として私は常に、経済や政治的な変化の裏にある、宗教・宗派・人種・民族間の関係に注意を払ってきました。

しかし、実を申しますと、最近の中東情勢進展を見るにつけ、私は宗教・宗派・人種・民族間の調停・和解・調和の可能性の未来について、かなり悲観的な考えに傾かざるをえない状態になっておりました。アラブ対イスラエル、イラン対イラクの国家間の対立は、イスラム教対ユダヤ教、シーア派対スンニ派と

いうように、宗教・宗派・民族間対立へと日々発展し、個人と個人の関係を引き裂きつつあります。

こうした悲観主義に陥りつつあった私に、小さな希望の光を感じさせてくれたのが、インドのここ「アジアプラトー」での滞在でした。

さまざまな国から、さまざまな政治的・宗教的バックグランドを持った人が、この「アジアプラトー」にやってきております。私はミーティングや食事の場を通じて、これら多くの人々と語る機会を得て、MRAの人達の、寛大さと寛容さに大きな感銘を受けました。

しかも、この寛大さと寛容さは暖かいものでした。宗教や宗派や民族の問題を、「客観性」「科学性」の名の下に、つき離して分析し、中立性を装う冷たい寛大さや寛容さが、世界中で幅をきかしている今日、ここ「アジアプラトー」に集まったみなさま方の寛大さと寛容さこそ、個々の宗教や宗派の違いや民族の違いを越えた、人間の心の奥底から湧き起こる、宗教的な「何か」に支えられた暖かいものの

ような気がします。そして、この寛大さと寛容を育む地こそ、このインドという国であるのかもしれません。

MRAの多くの友人から聞いたところでは、このインドにも、中東から、分裂と分極化の風が吹きはじめているそうです。インド各地の分離主義運動、パキスタンの政治的混乱、そしてスリランカの人種暴動と、中東からインド洋へ、そして東南アジア・東アジアへと拡がるこの分裂と対立の傾向の中で、今日ほど、MRAのみなさま方の寛大さと寛容さに基づいた、調停・和解・調和の精神が必要とされる時代はありません。

「アジアプラトー」の心暖まる食事のような、「和解」のメニューを唯一提供できるのは、宗教・宗派・民族の差を越えたMRAの「アジアプラトー」というメルティング・ポットではないでしょうか。

貴重な機会と体験を与えて下さってどうもありがとうございました。みなさま方の健闘を信じて疑いません。

（パンチガーニでの発言より抜粋させていただきました。）

スリランカ キャンペーン

インドの会議終了後、五ヶ国の十名からなるMRAの一行は、相馬雪香さんを団長に、スリランカ、タイへと向かいました。

スリランカのジャヤワルデネ大統領御夫妻は、一行を白亜の大統領官邸で迎えられ、こう言われました。「MRAは、世界に共通する普遍的な考えです。

世界のいたる所にこの考えが浸透することは、たやすいことではないでしょうが、私と妻は全面的に支援いたします。」

「ちょうどいい時に来て下さった。」プレマダサ首相は言われました。スリランカでは、昨年七月に暴動が発生し、少数派のタミル人が襲撃されて、大きな痛手を受けました。今でも恐怖と緊張感はさめやらず、弁護士や医者を含む多くのタミル人が国外脱出をはかっており、心ある人々は頭脳流出を心配しています。ときあたかも、タミル人と多数派のシンハラ人双方の代表者を中心にして、和解のきっかけをつかもうとして、話し合いが進められていたのでした。

首相は、側近のブラッドマン・ウイーラクーン氏に命じて、一行ができる限り多くのふさわしい人々に会えるようはからって下さいました。その結果、タミル人（ヒンズー教徒）と、仏教の指導者（主にシンハラ人）を含む、多数の指導的立場にある人々と会見することができ、また、ウイーラクーン氏の司会で、一行がパネラーとなったセミナー「共通のアイデンティティを求めて」も、コロンボで開催されました。

（一行に加わっていた、アメリカのランディ・ラッフィンさんの文章を抄訳させていただきました。）

MRA offers help

by Christine Nadarajah

A twelve-member delegation on Moral Re-Armament is presently in Sri Lanka to meet the country's leaders, the ordinary people and discuss ways by which they could help our country in its present situation.

Led by Mr. A. R. K. Mackenzie, Britain's ambassador to the United Nations and presently working with the Brandt Commission on North South problems, the delegates come from Australia, Japan, France, U.S.A. and Great Britain.

"Moral Re-Armament is, in a nutshell, a worldwide network of people who have given their lives to the building of a hate-free, fear-free, greed-free world. We believe that by first applying this philosophy in our lives, we have taken the first step towards achieving our goal."

(Contd. on page 3)

The Delegates of Moral Re-Armament visiting Sri Lanka paid a courtesy call on the President and Mrs. J.R. Jayewardene yesterday at President's House. Delegation consists of Dr. K. E. Beazley, Mrs. Beazley, Mrs. Yukika Sohma, Mr. A. R. K. Mackenzie Mrs. Mackenzie, Mr. Hugh Elliott, Mr. Maurice Noslov, Mrs. Richard Ruffin, Mr. John Chidell, Mr. Dick Channer, Miss. Chie Takahosi and Miss. Janet Mace.

●ジャルワルデネ大統領を囲んで……（1月23日付のスリランカの新聞記事から）

アジアへの呼びかけ

相馬　雪香

毎年スイスのコーで開かれる、MRAの世界大会には、アフリカ・南米を含む世界各地から多数の人が集っており、日本からも、東芝の労使チームを初めとして、三、四十名に及ぶ代表が参加しているのは、すでにこの会報で報告の通りであるが、アジアの他の地域からの顔が少ないことが、昨夏、話題にのぼった。

アジアといえば、一九五二年、MRAの創始者のフランク・ブックマン博士が、二百五十名に及ぶ国際チームを率いて初のアジア大会を開いたのは、セイロン（現スリランカ）であり、その足跡は他のアジア地域にも及んでいた。

永年アジアに関わりを持ち続けた人達とのチームワークが実って、今年の一月にインドで開かれる『第四回、開発のための対話』に参加してから、ひき続きスリランカ、タイを訪問するという具体案がまとまった。一行には、英国から元チュニジア大使で、今はブラント委員会で南北問題に取り組む、アーチー・マッケンジー夫妻、ディック・チャナー氏ら五名が、フランスからはモーリス・ノレ氏が、オーストラリアからは前労働党内閣の教育大臣のキム・ビーズリー夫妻が、アメリカからはラッフィン夫人が、そして日本からは相馬と高橋千恵の二人が加わった。

経済的、工業的開発を急いだ後遺症として、心の問題が問われだしている先進工業国と、極度の貧しさに悩む発展途上国とが、同じ一つの地球の上に共存して生きなければならないのが、今日の大きな課題である、という共通の認識の上に開かれたインドの会議では、特に、「内的な開発、人間としての心の開発」が問われ、「先進国といえども、その点では開発途上国である。」というアメリカの参加者の発言が印象的であった。

日本においても、とかく西欧の物質文明のひずみを指摘し、アジアの伝統的文化の再活性化を求める声も漸次大きくなっている現在、アジアと西欧の人達とが手をとり合って、共に世界の問題に積極的に取り組むために、夏のコーの世界大会と、五月に開かれる日本の国際会議への参加を要請することが、今回のスリランカ・タイ訪問の目的の一つであった。

思えば一九五一年、サンフランシスコで開かれた講和会議の際、いまだ戦争のしこりが生なましいアジアの国が、日本に対して心を開くことを渋っていた時、セイロン（現スリランカ）のジャヤワルデネ代表（現大統領）が、真っ先に口火を切って「日本との講和」を促したことは、私たちの記憶に新しいことである。そのことを踏まえて、現在、内には民族間の争い、外には世界的不況の余波を受けて苦しんでいるスリランカに、幾らかでも役に立つことが出来るなら、という気持ちが私の中にはあった。

●難民キャンプの子供たち

「是非いろいろな人に会っていって下さい。自国の問題にだけ落ち込んでしまわないで、われわれの仏教的伝統を世界のために生かすという考えは、確かに必要です。」スリランカでの一行の日程の責任者は、こう語った。

今回、スリランカとタイで、責任ある立場の多くの人達と語る機会を与えられ、アジアがかかえている問題に生に接し、日本に戻った時に、改めて日本の幸せをしみじみ味わったのである。それと同時に、この幸せを満喫してだけいては申し訳ない、という気持ちで一杯になった。

地理的にも恵まれ、封建社会から近代国家に移行した明治維新も、徳川慶喜公を初めとした時の指導者達の自己を捨てた英断によって、世界に類を見ないほど平和的に、権力の移譲が行われたこと、また、敗戦の時にも、分裂国家の辛酸をなめる危険を、蔣総統の寛大さとマッカーサ元帥の英断でまぬがれたこと等々、考えれば数多くの幸運に恵まれた日本である。

「運が良く、多くを恵まれた人は、より不幸な人たちのために尽くすべきだ」同じことが、国家についても言えるのではなかろうか。

「平和を志向する国際国家」をめざし、「国際社会の中で、協調的な信頼できる国」として受け入れられるためにも、日本は、他に役立つ国になることが求められている。

今回、物質偏重と言われがちの西欧と、エコノミック・アニマルと言われる日本からの人間が、心を一つにして、動乱と、相克と、貧しさに苦悶する地域に対して行なった、「何をも求めず、謙虚な心を持って、自らの足りなさをふまえて、真摯に心の声に耳をかそう」というMRAの呼びかけは、アジアの心の琴線に触れることができたと言っても、過言ではない。

●カンボジア領内、ドンレック村（約2万人収容）での衣類贈呈式――トラックには「日本国民より愛をこめて」というたれ幕がかかっていた

タイ報告

――藤田 幸久

インド・スリランカに続くタイ訪問は、一月二十七日から二月四日までにわたった。スリランカから移動した八名の他、ダンテ・カルマ（フィリピン）、ソン・スーベール（カンボジア）、金森茂一郎（近鉄副社長）、中井実（同監査役）、藤田幸久（事務局）が加わり、計十四名が参加した。

立憲君主制の仏教国であり、植民地化の波をもかわしえたタイは、日本と多くの共通点をもっている。しかし、四方を海で囲まれた日本に比べ、タイはカンボジア（東）、ラオス（北）、ビルマ（西）、マレーシア（南）と、戦乱や紛争の絶えない隣国との約四千キロにも及ぶ国境線を擁している。既に国内にかかえる約十四万人の難民の他に、ベトナム軍の乾期攻勢にさらされるカンボジア難民、ビルマ軍との戦闘でタイ側に押し出されるビルマの少数民族、マレー共産党の動きに攪乱されるタイ南部など、多くの負担を周囲にかかえている。

しかしそうした周辺国の歴史にもかかわらず、独立と安全とを維持したタイの知恵と体験とを学んで、国際連帯の一助にしようという一行の呼びかけに対して、タイ各界の指導者は心を開いて応えてくれた。

シチ外相は、戦後のMRAのアジアにおけるかけ橋作りの働きを回顧しながら、東南アジアの重要性を認識したイニシアティブを、今回MRAがとったことを感謝した。ASEAN（東南アジア諸国連合）のプラチャ事務局長は、単なる経済協力から集団安全保障を含めて、平和作りに積極的な役割を果たすASEANへの理解と協力を求めた。

プレム首相に代わって一行を迎えたビチャイ副首相は、タイから小田原国際会議（五月）やコー世界大会（七月～八月）に代表を送りたいと述べた。

上下両院を代表して一行を迎えたチャルブット国会議長は、宗教間の違いを越えた平和作りの緊急性を述べた上で「政治家を含めて個人が心に平和を築いて、人格向上に務めることが、今は特に必要である。」と語った。

一行はまた、タイ仏教界の最高位にある三人の指導者を訪ねることができた。大僧正（サンカラージ）は、「仏教の教えを忘れ、いがみ合いや汚職に明け暮れたことから生じた今日のカンボジアを再建するためには、仏教の教えを一人一人が実践することが最も大切である」と述べたソン・スーベール（カンボジア）の決意に賛辞を送った。

●ソン・サン首相（中央）及び若い僧侶と国の再建について懇談する一行（スロック・スラン村）

●タイのシチ外相と対談する相馬雪香さん（右はし）

「仏教大使・西洋へ」という記事で知られるプラ・ピムラタム師は、他宗教との交流に加えて、アジア諸国の仏教界相互の交流についてのMRAの動きに関心を寄せた。

今回の忘れ得ぬ体験は、カンボジア国境への訪問であった。一行は六時間のドライブのあと国境の厳重なチェックポイントを何回か越えて、ドンレック村に入った。ソン・サン系の七つの村で最も新しいこの村は〝自助努力〟の精神を生かして、細かい管理が行き届いていた。相馬雪香さん（インドシナ難民を助ける会会長）からソン・サン夫人に、昨年日本全国で集めた千三百トンの衣類の一部が贈呈され、多くの歓声があがった。

続いてスロック・スラン村で、ソン・サン首相に迎えられた一行は、カンボジア各地から招かれた十一人の若手僧侶との懇談に移った。最近は国の再建に不可欠の文化・道徳・宗教教育に力が入れられているが、こうした僧侶のほか、村の教育者や責任者をMRAの小田原会議（五月）や、コー世界大会（七月～八月）に派遣したい、とのことである。

一たん失った国を再建するには、気の遠くなるほど多くの困難を克服しなければならないことが身にしみてわかるが、その基本ともいうべき「人造り」の助けに、側面からでも加われることは、大変な光栄であると思う。

今回の訪問は、この地域の問題解決のためには、ASEANの叡智・インドシナの苦悩と叫び、西欧の理念、日本の国造りの体験や和の精神などをもちよった、国際的な協力とチームワークが必要であることを強く感じさせてくれた。こうした輪が更に広がることを念じてやまない。

●タマサト大学学長、最高裁裁判長、タイでは数少ない文民宰相などを歴任したサンヤー・タンマサック氏（後列中央）と

タイ訪問に参加して

近畿日本鉄道株式会社副社長
金森　茂一郎

一月二十九日、降雪の大阪を出て、夕刻三十度を越すバンコクに到着した。

翌三十日、私と、会社の同僚でタイ出張十回以上、要路に知人の多い中井実氏（近鉄監査役）とは、既にタイ入りしていた一行に合流した。そしてASEAN（東南アジア諸国連合）のプラチャ事務局長訪問を皮切りに、仏教会の指導者プラ・ピムラタム師、またビク・パンヤナンダ師をそれぞれの寺院に訪ね、親しくお話を伺った。バンコク郊外の後者の僧房を辞去したときは、日は既に落ちていた。

翌日三十一日は、日本大使館で立花大使にお目にかかった。相馬さんが、「好運に恵まれ、繁栄を享受している日本の責任としての、難民の救援と、これを通じて日本の国民の目を広く世界に開くことの必要性」を述べられたことに対し、大使も共感と謝意を表明されていた。

以上が、私の参加したバンコクでの日程の大略であるが、この間の印象、殊に仏教に関連した事柄について申し添えたいと思う。

接した範囲は限られていたが、タイの人々の態度の柔和さは、まことに印象的であった。挨拶に合掌する外面の姿だけではなく、その人ざわりの和やかさは格別であった。この柔和さは、何処から来るのであろうか。仏教の影響によるところが少なくないのではなかろうか。

よく知られているように、この国では、青年は一定期間僧侶としての修行をする。近年は、一週間といった短期間でもよいとのことであるが、ともかくこうした経験を、すべての青年が共有するのである。

また同国の仏教は、シャカ時代以来の伝統的な僧伽（僧侶の集団生活組織）の尊厳を、保持しているように思われる。厳格な戒律の実践（戒）、瞑想（定）それによる真理の体得（慧）に精通している姿は、在家信者から深い尊敬を受けるに価するのであろう。また、現在にふさわしい役割――国際的活動、西欧社会への仏教紹介、平和運動など――にも積極的であるようにも見受けられた。いただいた英文季刊誌を披見しても、その活動ぶりが推察できた。

ちなみに、MRAと宗教について、私は次のようなことを考えていた。

それぞれの宗教は、独自の形而上学的な教義を持つ。その相異があっても、それから流れ出て現実社会の個人を支配する道徳項目は、不思議に共通である。

異った宗教環境にあるグループが和解に達するには、しばらく教義の相異を棚上げして、普遍的な実践道徳を強調することが肝要で、MRAはまさに、その役割を果たすものである。

仏教の古いお経に、籔喩経（矢のたとえ）というのがある。

「矢がつきささった人にとって大切なことは、その矢の材質は何か、矢羽の色は何かという議論の前に、先ず出来るだけ速やかに矢を抜きさることである。」

このようなことを考えていた私が感銘を受けたのは、八十歳のプラ・ピムラタム師の次のような言葉であった。「知識には、友となる知識もあるが、敵となる知識もある。最も大切なことは、実践（プラクティス）である。」

もう一つ印象深かったのは、夕闇のバンコク郊外の僧院で、パンヤナンダ師にお会いした時の雰囲気であった。野趣あふれる周囲に、黄衣をまとった老僧の声音を聞いていると、日常生活から遠く離れた別世界に遊ぶ感で、これだけでもタイに来た甲斐があったとすら思えた。

正味二日、まことに短い期間であったが、私にとって長く思い出に残る貴重な経験であった。

●ASEANのプラチャ事務局長を訪ねて（右から5人目が金森氏、その左どなりが中井氏）

●プラ・ピムラタム師（左はし）との懇談。右はしは、オーストラリアのビーズリー氏（元教育大臣）

MRA関係出版案内
「心のささやき」（改訂版）
柳沢錬造
（参議院議員
国際MRA日本協会理事長）
（定価250円）
（送料200円）
※当協会でお取りつぎいたします。
☎03(821)3737

オーストラリア会議

アジア協会、アジア友の会
（現在、西オーストラリアの大学に留学中。）
徳永　誠

去る一月八日から十五日まで、オーストラリア、シドニー郊外のビジョン・バレーで、MRA会議が開催されたが、日本政府派遣の交換留学生として来豪していた私は、日本のMRA協会の方々の紹介を受けて、この会議に参加することができた。

この会議は、「新しい精神の新しい展望」のテーマのもと、主にオーストラリア国内の各地から、百三十名余りが参加したが、その大半は子供連れの家族であり、八日間の会議も、くつろいだふんいきの中で、種々のワークショップ（音楽、劇、ビデオ等）、各種スポーツ（水泳、乗馬、カヌー、クリケット等）や、子供達のためのプログラム（音楽、MRA版セサミストリート等）が用意されていた。

また、全体会議では、「家庭」、「職場」、「信仰」、「平和」が主題として取り上げられ、各人がそれぞれの場で、どのようにしてMRAの四つの絶対標準（絶対正直、純潔、無私、愛）をいかしていけるかについて、自由な意見交換が行なわれた。

フランク・ブックマン博士が述べられたように、「一人一人が変わらなければ、世界も変わることなく」、真の世界平和は、個人の心の平安に始まり、家庭、職場、地域社会を成す一人ひとりの信頼関係の基盤の上に成り立つことが再確認された。

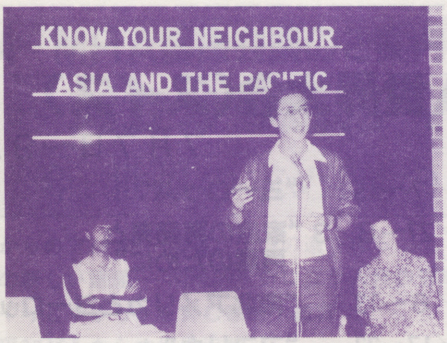
ところでオーストラリアは、現在マルチカルチャー・ソサエティ（複合文化社会）を目ざしているが、隣国であるアジア・太平洋諸国からの移住者や、アボリジニー（オーストラリアの原住民）を白人社会の中に受け入れ、相互理解を促進していくことに努めており、会議期間中のある晩には、アジア各国の文化紹介や、アボリジニーの生活についてのスライド上映を行なって、隣人に対する正しい認識を深めていた。

アジアに位置する西洋社会であるオーストラリアと、明治維新以来、脱亜入欧を目ざしてきた日本は、隣国であるアジア諸国との友好関係の構築という点において、同じチャレンジを受けていると言えよう。

私は、会議中、アジア諸国からの参加者と親しく接する機会を得たが、ビルマからの参加者の一人が、「私達アジア人は、日本の経済的成功に敬意を表しているが、今だに日本に対して不信を抱いている。」と述べたことを忘れることができない。

同じアジア人でありながら、他の同胞を見下し、その犠牲の上に繁栄を築いてきた日本人は、今こそ、よりよきアジア地域社会建設の為に努力すべきであろう。それは、短絡的に、物や金による援助をすることではなく、まず何よりも「心の開国」、すなわち対等なパートナーシップに立って、相手を正しく理解し、いたわりと分かちあいの心を持つことであると私は信じる。

世界平和―それは一人一人が、利己心、おごり、偏見を捨て、まずは自分の身のまわり、すなわち家庭、職場、地域社会の人々との友好・信頼関係を構築していくこと（それは、時には自分の価値観を主張することを控え、相手をあるがままに受け入れる寛大さも必要とされるが…）から始まることを、私はこのセミナーを通して学ぶことができた。



●『アジア・太平洋の隣国を知りましょう』（日本代表として話をする徳永さん）

ブッシュランド会議（オーストラリア）に参加して

大木　浩史

せみしぐれの中でクリスマスを迎えた後、一月八日から十五日までシドニー郊外で行われた会議に参加するため、一路シドニーへ向かいました。この会議の特色は、従来の会議と違って家族ぐるみで参加でき、個々のファミリースタイルから世界の諸問題に至るまで話し合うことができるというところにあります。会場のビジョン・バレーは、シドニーから北に約四十キロほどのところで、「ワライカワセミ」の鳴き声などを耳にし、乗馬、カヌーなどのレクリエーションの設備があるという、まさに森の国といったところです。

こうした環境の中で、子どもは子どもとして、また親は親として家庭の中での役割について考えること、そして国や世界に対する家庭の役割について考えるということが、とても素晴らしいもののように感じられました。中でも一番印象に残っているのは、最近日本でも話題にな

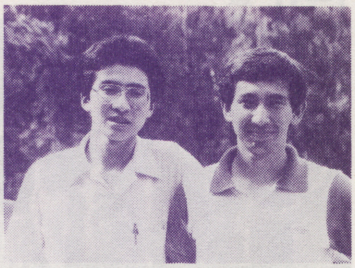
っている、一生独身者という家族形態のこと、また、キャンベラから来た少年が、「僕はいつも兄さんに対して嫉妬ばかりしていましたが、この会議を通じて、再出発をする決心がつきました。」と言った点です。

また、アジアをはじめとする太平洋の国々に対して、先進国としての日本の役割について、アジア協会・アジア友の会の徳永さんに話していただきました。日本の動きや日本人の意見に、オーストラリアの人々はとても敏感なようで、みんな耳をそばだてて聞いていました。

一番印象に残っているのは、パプアニューギニアから来た人の話でした。小さな村の豊富な材木に目をつけた外国資本の会社が、個々の家族に莫大な金額を支払うことを条件として、材木伐採のために進出してきたそうです。素朴な村人たちは、この金をどう使っていいのかわからず、あげくのはてには、飲酒・ギャンブル等に明け暮れ、村の治安は悪くなる一方で、これと同じような問題が、国中のあちらこちらで起こっているとのことでした。一見、お金や物質による力で、援助協力や対等な話し合いがなされているような気がしても、実際にはなんにもならず、そればかりか彼らの生活を破壊してしまっているのです。

我々日本人も、同様のことをじているのではないでしょうか。今ここで、何が本当に正しいのかということを一人一人が考え、ともに実行することの大切さをつくづく感じました。

また、日本でも、早くこのように家族ぐるみで参加でき、人間どうしの生活・世界のための個々の役割について考え、話し合うという会議を持つように努めたいと思います。そしてそれらの会議を通じて、校内・家庭内の暴力などの問題が、少しでも解決また予防できるように望みます。



●シドニーの会議に参加した大木さん（右）と徳永さん

●フィリピンMRA財団の会長、バルボア夫人（右から6人目）のお宅に集うMRAチームの方々（右から3人目が藤田さん、左端がクレイグさん）

フィリピン

昨年12月下旬、事務局より、ジェフリー・クレイグ、藤田幸久の両氏が、フィリピンのMRAチームをマニラに訪問しました。その際には、一万六千人の難民を一時的に受け入れ、「インドシナ難民を助ける会」（相馬雪香会長）からも援助を受けている〝バターン一時滞在難民施設〟をも訪れました。

昭和59年度コーMRA世界大会（スイス）

7月7日〜9月2日

テーマ

「地球の様相を一新するための一人一人の役割」

（Everyone's part in Renewing the face of the Earth）

7／7〜15　**"ヨーロッパ"**

7／27〜8／3　**"家庭の再発見と再建のために"**

8／6〜13　**"南北アメリカとヨーロッパ"**

8／17〜23　**"アフリカ"**

8／24〜29　**"人と経済"**
創造性――危機を乗り越えるために
（産業界や労働組合の人々、及び政治家、経済的問題に関心のある人々のためのセッション）

8／30〜9／2　**"政治会議"**
地球の様相を一新するには

眼下にレマン湖を望む景勝の地、スイスのコーで開かれるこのMRA世界大会には、日本からも毎年50名くらいの方々が参加されております
詳しくは事務局まで

各地でのMRA活動

※視察研修団（十二名）が韓国へ

（昭和五十八年十月五日～十日）

九州MRA協力会によるこの訪韓視察団も、今年で十三回目を数えます。

「日韓関係は、過去お互いに両国の相違ばかりをあげつらい、欠点ばかりが目につきすぎた。今後は日韓の相違点ではなく、両国の共通点を探り合う努力を続けていかねばならないのではないでしょうか。」

（視察団のために講演された李恒寧博士〈世界平和教授協議会会長〉の言葉を、レポートより引用させていただきました。）

九州MRA協力会

※MRA講演会開かる

（福岡）

去る二月三日、九州MRA協力会と国際ソロプチミスト福岡の共催で、文化講演会が開催され、MRA日本協会の高瀬会長が、「MRAと私」のテーマで講演された。寒い日だったにもかかわらず、百二十名以上の方が熱心に耳を傾けられた。

●「思いやりの気持ちを実践するのがMRAですよ。」と語りかける高瀬会長

※大田原市（栃木）

二月十八日、大田原市のニューセントアンドリュースゴルフクラブで、従業員及びMRA会員の方達を対象に、柳沢錬造理事長が講演をされた。「自分一人が聖人君子になることではなく、エゴイズムを排し、世の中を良くするために自分のやれることをやっていくのが、MRAの目指すところです。」と、御自身の体験を例にとって話された。大雪のあとにもかかわらず、集まられた百名余りの方々は、講演後も質問をされたり、「自分も妻には嘘をつかないようにしたい。」という感想を述べられたりと、最後まで熱心に参加された。

※月例会

（二月二十五日㈯二時より、田端のMRAハウスにおいて）

アジアの国々を訪れた、相馬雪香、藤田幸久、高橋千恵の各氏からの報告もあったこの会には、四十名の参加があり、中には、インドシナ難民のために集められた衣類千トンをタイへ送る、ボランティアの人達を初めとした、九人の外国の方々の顔も見られました。

●ジェームズ・エイトキン氏（アメリカセブンスデー・アドベンチスト教団）

「先ごろタイの将軍が、日本の方々の好意で難民のために集められた衣類が一時的におさめられている、神奈川県の倉庫二つを視察され、深い感銘を受けてこう言われた。『不幸な人々に救いの手をさしのべることによって、戦争の傷あとが、いやされつつある。それも、かつての敵国日本の人々の手によって……』」

●関屋正彦さん（聖公会司祭）

「日本と他のアジア諸国との関係は、完全にはいやされきっていません。日本は豊かになってきましたが、謙虚さと質素な生き方とを忘れずに、隣国諸国のためにできる限りのことをしていくことが、真の和解への道となりましょう。」

（月例会での発言から）

1984 MRA国際会議のご案内

テーマ **対立から融和へ**
——今、世界の求めるもの

1. これからのアジア——道義立国への道を探る
2. 産業の新しい課題——国際的視野に立つ人格の形成
3. 思いやりとやすらぎを育む家庭・教育
4. 心の平和がもたらす世界平和

Ⅰ 小田原会議　5／18㈮～20㈰　Ⅱ 関西プログラム5／22㈫～26㈯
Ⅲ 東京プログラム5／28㈪～6／7㈭

今年で第8回目となるこのMRA国際会議で、海外からの多数の参加者とともに、家庭から国家間にいたる問題の解決の鍵をさがし、融和をもたらすために、おのおのが何から始めるべきかを学んでまいりたいと存じます。
皆様のご参加をお待ちしております。

※お問い合わせは、国際MRA日本協会事務局（〒113 東京都文京区千駄木4－13－4 TEL03－821－3737）へ。

◇結び〈その一〉

マスメディアの時代に入った今日、情報に接することがたやすくなってみたものの、物事に客観的になることは依然として難しいことである。対立し合うグループや国家の間では、お互いの非難の応酬がやまない。結局反米とか、反共、反黒人か反白人、反イスラエルか反アラブというふうになってしまう。敵方はいつも挑発、帝国主義、搾取、拷問、破壊活動、抑圧などのかどで告発されるのである。

事実と宣伝とを区別することは難しい。人間が人間である以上、向けられた非難の多くは的を得たものであろうが、非難をしている人自身が基準の使いわけ（ダブル・スタンダード）を用いているかぎり、非難による所期の効果はそこなわれてしまう。自分の陣営の不正や搾取を一つのものさしではかり、他の陣営の誤りを別のものさしではかるのである。つまり誤りそのものに反対しているのではなく、他の陣営に反対しているのである。

対立しあうグループの両方が独善的であることが、進歩を妨げる。政権に反対する人を抑えるために、ソビエトでは注射が使われることにショックを受ける人が西側に多くいる。たしかにこれは野蛮なことではある。しかし、一方西側では自分の自由意志で麻薬を注射して同じように命を減ぼしてしまう若者が一体何人いるのだろうか。我々西側社会の何がこうした結果をもたらすかについて直面し、さらにそれを正したことが我々にあっただろうか？それを済ましたあとであれば、他人を裁くにも違った権威ができるであろう。また抗議も、それが向けられる人にとって手ごわいものとなろう。

ノルウェーの著名な神学者ソーリーフ・ボーマン博士は、最近共産世界と西側の非共産世界について、次のように書いている。「残念ながら、もはや両者の間には根本的な道義の差など存在しないことを認めざるをえない。道義に関して一方が他方に対して説教できるような根拠など、どちらにも存在しない。」

ボーマン博士の本を何冊か読んでいえることは、彼は人権を尊重する社会とそうでない社会、或いは自由選挙のある社会とそうでない社会との間に、道義的違いがない、と考えているわけではない。彼はより深いレベルに、つまり真理に対する裏切りについて述べているに違いない。

キリストは、長年にわたり神がユダヤ人に授けた真理の保管人であるパリサイ人への、最も厳しい裁きを差し控えた。パリサイ人は法をわきまえ、法に従う代表者であったが、真理を裏切ってしまったのである。

MRAの指導者で英国の劇作家ピーター・ハワードは彼の劇「ブラウン氏丘を下る」で次のように述べている。

「ここ地球では共産主義者がその半分をおおっている。彼等は母親のお乳を通してカール・マルクスをたっぷりふきこまれる。神を憎むように教わるので、本能的にか秘やかにしか神を知るすべがない。彼等は神を葬った。或いは何とか葬うとした。しかしながら彼等は、飢えた者に食物を、家無き者に家を、そして人の心に何か新しい希望をなげかけようと血と拷問と飢えをもしのいで前進しているのだ。」

「一方、自己の正当性を固く信じて疑わない非共産主義者が存在する。彼等は神について語り、『神の御名において信ずる』と貨幣に刻んでいる者すらいる。五十年間に起こった二つの世界大戦は、この恵まれた機会と確信に満ちた地球のこちらの半分から勃発しているのである。ファシズムという下剤、ヒットラーのガス室やゲシュタポを生み、マルクスの哲学やスターリンの燃料と炎を生み出すきっかけとなった社会や経済の不正を許したのもこちら側である。神を恐れるように教えられたにも拘ず、皆結局神から逃れようとしてしまう。キリスト教である筈の西側も今ではセックスを礼讃し、信仰をあてこすり、敵側の物質主義は忌み嫌いながら、自分の側では合理化しようとしている。富を擁し、力を擁し、信仰の機会を得、常に希望と信頼とを享受していると自負してきたのに、一体それをどうしてしまったのだ？」

非難合戦に麻卑し、変革ができない状態から抜け出すには、古くからある「隗（カイ）より始めよ」という名言がある。これは、自分の間違いよりも相手の間違いにのみ関心が向くさかさまの世界に生きるのではなく、自分が直接かかわった間違いを取り除くように務めることである。自分の側から始めることによって、

自分自身の裁量で何かが実現することを見ることができる。一方、他人を裁くことは、自己弁護や変革に対するより強い抵抗以外何も生み出せない。

抗議をすることがしばしば必要なことは勿論である。抗議は社会悪に対して世論を喚起し、人命を救い、時には抑圧者のやり方を変えることすらある。国の内外の風潮が名声によって左右されるだけに限らず、抗議の裏にある態度もまたきわめて重要である。

ノルウェーの首相を務めたアイナ・ゲルハルドセンは、一九六四年のフルシチョフのノルウェー訪問について、次のような話をしている。ゲルハルドセンは、このソビエト指導者がノルウェーに先立ってデンマークとスウェーデンを訪れている間に、次のような観察をした。それは、彼を迎える指導者達から自慢したいものを見せられた時には、フルシチョフは、ソビエトにはそれに勝るとも劣らないものがあると必ずこたえていることであった。

オスロ訪問中ゲルハルドセンは、車でフルシチョフを市の最も荒廃して汚い地域に連れて回り、そうした地域がまだ存在するのは誠に残念だが、それを改善する時間と財源がなかった、と説明した。フルシチョフはしばし沈黙したあと、次のようにこたえた。「実際、ソビエトと同じくらいひどいものだ！」

自分の側の欠点から始めることで全てが解決するわけではないが、名声や不信によって左右される今日の国際環境の中では、これが極めて大きな違いをもたらす。これはまた、自分の側よりも敵側の問題に目が向いてしまう見せかけの世界に生きることなく、実際の問題に取り組む上で大きな助けになろう。

これは勿論〝イデオロギー的共存〟と混同されてはならない。自分が望む社会についてのビジョンがあれば、その実現のために闘うことになり、そうすれば自ら、自分と違った考えを持つ人々と衝突することになろう。「にせのイデオロギーと闘うには〝脱イデオロギー〟ではなく、本物のイデオロギーでなければ闘えない。」と、ユーゴスラビアの作家ミハイロ・ミハイロフが、「ニューヨーク・タイムス」で述べている。

希望的観測がいくらあっても、イデオロギーの闘いを処理することはできない。しかし、その闘いをより建設的なレベルに引きあげるようにすべきである。恐れ・憎しみ・盲目的愛国心・扇動行為・ごまかしなどは、破壊的な要因を持ち込むだけである。対立はしていても敵ではない、というところまで到達せねばならない。そうすれば、イデオロギーの対立も、必要とされる社会組織の新しい形態や新しい態度を見い出すことに貢献できるようになる。

一人ひとりの決意から

住友　美子

敗戦後、世界から戦争の責任を問われていた日本に対して、一九五七年、フランク・ブックマン博士（MRAの創始者）は、日本の百名の青年を、アメリカのマキノ島で開かれたMRA世界大会に招いて下さいました。たまたまその中の一人となって、私ども夫婦はこの大会に参加する機会を得ました。そしてヨーロッパ、オーストラリア、アフリカ、アジアからの各国の人々と共に生活し、彼等の話を通して、戦争により日本が、各国の人々に与えた傷の痛みも知ることができました。

私どもは、四つの絶対標準（絶対正直、純潔、無私、愛）を通してまず自ら変わることを、MRAによって教えられました。私はそれまで、いつも絶対に自分が正しいと信じていましたが、正直にふりかえってみると、私の心の奥底には、人に対する恨みが一杯でした。この現実の自分の姿に気がついて、その蛇のような執念深さにぞっとしました。自分で耐え忍んできたことも、その時初めて慰められ癒され、神はいつも自分を受け入れて下さっているのに背を向けていたのは自分であったことに気づき、神の存在を初めて肌で感じました。

子供達にも私の間違いを話しましたので、「ママは偉いと思っていたから、本当のことが話せなかった。」と、幼稚園の息子はママの財布からお金をとったことを、正直に打ち明けてくれました。

サイゴンの陥落は私には大きな衝撃で、日本はアジアに対する役割を果たしていないことを申し訳なく思い、もう一度一から出発したいと、一九七五年に、スイスのコーのMRA世界大会に出席させていただきました。ここで出会ったラオスの元高官の御夫妻から、東南アジアの現状を教えて頂き、アジアの人々は日本がまっすぐに進み、「アジアの灯台」となって救いの手をさしのべてくれることを、どんなに待ち望んでいるか、またどんなに多くの人が「解放」という言葉の下に殺害されているかを知り、私どもは、日本人の責任というものを痛切に感じました。と同時に、フランク・ブックマン博士の言われた「あなたの在り方が国の在り方であり、それが世界の在り方となる」という話を、改めて認識いたしました。それは我執から離れ、許し許され、愛し愛される道に通じると思います。

特に中国では、日本の引き起こした間違った戦争の為に、多くの人命が失われ、国土が荒廃したにもかかわらず、蔣介石総統は、「怨みに酬いるに徳をもってする」と、日本人を中国本土から無事に帰して下さいました。その上、終戦にあたっては、賠償をとらず、天皇制を認めて、日本が混乱に陥る危機を未然に防いで下さった事に対して、我々日本人は心から感謝し、過ちを謝罪致したく思います。

私達のようなごく普通の婦人の一人ひとりが、個人の意識の変革を通じて、また、「静かな時間」を通して学んだやるべき事を、一つひとつ具体的に行なうことこそ、それぞれの国の民主主義を支える「鍵」になると信じます。互いに許し合い、助け合えるアジアこそ、世界の光となり得ましょう。問題は我々一人ひとりの決意と実践にあり、それにこそ、国と世界の将来の運命がかかっていると思います。

MRA日本協会は社団法人化を目指して会員数増加のキャンペーンを行っています。

会員になってMRAを支えて下さい！

国際MRA日本協会は昭和五十年に設立されて以来、世界各国のMRAチームの人々と共に手を携えて、調和ある産業や社会、さらには平和な国際関係の実現を目指して活動を続けてまいりました。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の「心の開国」を推し進めるために活動してまいりました。

さて当初任意団体で発足いたしました当協会も、MRA事業の一層の拡大をはかるべく、社団法人化を目指すことになりました。これを機に会員の増加をはかるキャンペーンを開始いたしました。また、より気軽に会員となって下される様に、これまでの個人会員年額一口五、〇〇〇円を、一口一、〇〇〇円に変更させて頂きました。この機会にぜひ当協会に御入会下されますよう御願い申し上げます。

御入会下された方には二ユース等の他に、各国での国際会議ならびに各種の会合の通知などその都度差し上げたいと存じます。

もし、御入会下されます場合は、入会申込書に必要事項ご記入の上、お送り下さい。尚入会申込書は、ご連絡下さればすぐにお送りいたします。

●会費

個人正会員（年額）
一口　一、〇〇〇円
法人正会員（年額）
一口　五〇、〇〇〇円

●払込先（郵便振替が便利です）
郵便振替口座：
東京8-38289
銀行口座：
富士銀行動坂支店
（普）236-8612220

入会御願い

●事務局近況●

●昨年十二月十七日（土）には、クリスマスパーティーが開かれ、田端のMRAハウスには五十人の歌声が響きわたりました。

●ゲームにはりきる学生達――クリスマスパーティでの一場面（右は飯塚さん〈慶応大〉左は春日さん〈日大〉）

●三年間事務局で、IMAJニュースの編集に、写真撮影に、子守りに、散髪に（元プロの美容師さんでした）と活躍してくれた寒河江亮さんは、青年海外協力隊の隊員として、一月二十五日にアフリカのザンビアに向けてたちました。「将来も国際協力の仕事につきたい。現地で学び、貢献する際に、MRAで学んだことが役に立つでしょう。日本での飽食の日々を恋しく思いながらも、トウモロコシの粉を食べてがんばっています。」という第一報をくれた亮さんは、首都ルサカで二年間、写真技術の指導にあたります。

●今年の年男の長野清志さんの婚約、六月二十四日挙式のニュースに、一同わきかえっております。益々の御活躍とお幸せとをお祈りいたします。

●IMAJニュースへの御意見と御感想をお寄せ下さい！

心に残る言葉

「無財の七施」

財なく、学なく、力なくとも、いつでもどこでも、誰でもできる七つのほどこし

一、眼施……やさしいまなざし
二、和顔施…笑顔
三、言辞施…やさしく、親切な言葉
四、身施……敬いの態度
五、心座……思いやりの心
六、牀舎施…場所や席をゆずる心
七、房施…心からのもてなし

（仏教の大蔵経の一部、「雑宝蔵経」より）